

観光における人と環境との関係

— 日本から知見が発信されることへの期待

2

首都大学東京 大学院都市環境科学研究科 准教授

直井 岳人

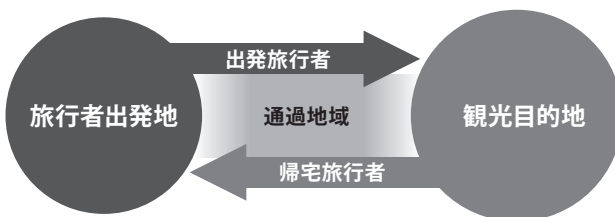
はじめに

私たちは自然、人工物、他者との人間関係など、さまざまな環境(場所・空間)と常に関わりながら生きていく。Walmesley と Jenkins (1993) が「観光は人と環境との任意の関係から生じる現象である」と述べるように、人が観光旅行をする状況においてもそれは同様である。場所は観光者が訪問するからこそ観光地となり、人は訪れる観光地があるからこそ観光者として行動することができると。また、このような観光現象の歴史は長く、例えばエジプトのピラミッドには、紀元前二四四年に、とある人物が兄弟とメンフィス(古

代エジプト遺跡が残る地)の西岸を遠足(excursion)で訪れたという落書きが残っている(Weaver & Oppermann, 2002)。観光における人と環境との関係は、日常生活におけるそれとは異なるものの、人間社会に深く根差したものだと言える。このような観光における人と環境との関係を研究することは、観光をする側と観光者を受け入れる側の双方にとって有益な示唆を提供する可能性がある。観光者は、日常環境を一時的に離れ、そのことで、日常生活では満たされない欲求を、新奇な経験をすることによって満たそうとすると考えられるが(佐々木, 2007)、宮原と宮原(2006)は、こ

うした非日常性が及ぼす、自らの既成の価値観との矛盾といった不均衡が観光者自身の成長につながる可能性を指摘している。このように、観光者にプラスに作用するという観点から、観光における人と環境との関係に関する研究は重要だと考えられる。さらに、観光者を誘致する側にとっては、観光地のどのような特徴が、観光者にとってどのような意味を持つのかを明らかにすることで、その観光地の課題と潜在的な魅力を見いだすための手がかりを得ることができると考えられる。このような人と環境との関係の重要性は、欧米を中心に発展した学術

図1 観光基本システム (A basic tourism system)



(Leiper, 1990) を筆者が一部和訳

的な観光に関する研究(以下、海外観光研究とする)において認識されている。例えば、多くの観光の概論書で取り上げられる Leiper (1990) のモデル(図1)では、観光は、出発地から観光地へと旅行者が出発し、出発地に戻ることで生じる現象だとされており、観光現象の生成において観光者と観光地が接することが欠かせないことを示している。また、心理学的海外観光研究でも、観光者の動機や欲求であるプッシュ要因(発動要因、push factor)と、観光地

自体の特徴を示すプル要因(誘引要因、pull factor)の関係 (Klenosky, 2002) がしばしば言及され、潜在的観光者(観光へ動機づけられた人)は、訪問地を決定する際、自らのプッシュ要因(例: リラックスしたい)と適切に対応するプル要因(例: 静かな山村)を考慮すると言われている。

ただ、後述するように、海外観光研究においては、観光者が現地を訪れて目にするであろう観光地の具体的な特徴を分析したものは少ない。そのため、どのような特徴を持つ観光地がどのような観光者にとつてどのように感じられるのかとついで、観光者と観光地の両方の特徴に鑑みた具体的な観光地マネジメントに資する知見が十分に生み出されていないように思われる。

本稿では、まず、人と観光地の関係に関わる海外観光研究、特に観光地イメージに関する研究を概観し、当該分野における研究の意義と課題について考察する。また、人と環境との関係に関する日本の建築環境工学分野の研究に着目し、当該分野における知見の、観光者欲求と観光地の特徴を考慮した観光地マネジメント

ントに役立つ研究への貢献の可能性について考える。

人と環境との関係に関する海外観光研究

人と訪問地環境との関係に関する海外観光研究のテーマとしてよく見られるものの一つに「観光地イメージ」がある。観光地イメージは、人が観光地に関して持つ、印象、感情、知識、想像、期待、信念といった、心理的な概念であることが多くの定義により指摘されている (Lawson & Baud-Bovy, 1977; Compton, 1979; Baloglu & McCleary, 1999)。また、観光地イメージ研究を概観した Gallarza ほか (2002) は、観光地イメージ研究が注目される背景として「出発前の観光者は実際に目の前にはない観光地をそのイメージで評価する」こと、「観光地イメージが観光者の行動や観光地選択に影響する」ことを挙げている。海外観光研究では Hunt (1975) の研究が観光地イメージ研究の始まりだと言われることが多いが (Gallarza ほか, 2002)、それ以降、「観光地イメージ

の属性(観光地イメージが何でできているか)の洗(出)」(Echner & Ritchie, 1991, 1993 など)、「観光地イメージが出来上がる仕組み」(Baloglu & McCleary, 1999 など)、「観光地イメージが再訪行動に及ぼす影響」に関する研究など、さまざまな研究がなされてきた。

観光地イメージ研究のなかでも、人と環境との関係に深くかかわると思われるものに、観光地イメージを、物理的な特徴である cognitive component (例: 人、建物) と、感情的な質に関する affective component (例: 美しい、落ち着く) に分類して分析する研究がある。これらの研究は、人が認識する場所の物理的特徴としての「心理的環境」(宮原・宮原, 2006) を人がどのように感じるかという、人と環境との関係性を表していると言える。このような研究では、当初は cognitive component に特化したものが多かったが、その後、affective component の抽出や測定の試みが見られ (Wainstay & Jenkins, 1993)、近年では両者の関係を分析する試みも、Baloglu と McCleary (1999) による研究を皮切

りに盛んに行われている (Beeri & Martin, 2004; Chew & Jahari, 2014; Qu, ほか 2014)。

観光研究ではその時々で異なる複数の非日常環境を想定しており、その点が日常環境に関する研究領域とは異なる点である。こうした非日常環境に、人がたまに一時的に接触する場面を実証研究において切り取ることは非常に難しく、観光地イメージの研究では、もっぱら、目前になく、メディアなどの情報を通して認識される大ざっぱな「心理的環境」を対象としている。こうした普段接触のない観光地の詳細な特徴を偏りなく思い浮かべることは多くの人にとって難しく、観光地イメージは事実を反映しない (Gartner, 1996) と述べる研究者もいる。

もともと、十分な知識や経験がなくとも、曖昧なイメージを基に観光地を選択することができる人が観光旅行に出かけることを可能にしているとも言える。したがって観光地イメージの特性や、観光現象が生じる過程において観光地イメージがどのような役割を果たし得るのか明らかにしようとする試みには意

味があると考えられる。

しかし、人と観光地との関係は必ずしもイメージの領域にとどまらず、観光地に実際に人が足を運ぶこともまた観光現象の本質である。したがって、観光者と観光地との接触が生み出す観光者にとっての価値に注目することは、観光の意味を問う上で重要な観点である。また、そのような観光者と環境との接触の場において、建物がどのような形をしているのか、どのような人たちがどのようなことをしているのかといった、観光地の具体的な構造と人の感じ方との関係に関する研究を行うことは、観光地マネジメントの観点からも意味があると思われる。

日本の建築環境工学の知見の応用

このような人の特徴と環境の特徴との関係性を明らかにすることを目的に、日本の建築環境工学分野で開発された手法の一つに、レポートリーグリッド発展手法が挙げられる。これは、讃井と乾(1986)によって提唱された、レポートリーグリッド

とラダーリングという二つの手法を発展させたものである。

レポートリーグリッドは、コンストラクト(人がものごとを区別する背景となる考え方。Kelly, 1955)を基に、複数のものごと(例:名前、写真や現物)を調査協力者に比較させ、それらを区別する理由をインタビュー等の回答から導き出す手法である。また、ラダーリングは、「ものごとの属性(特徴)は、特定の目的を達成する手段である」という手段目的連鎖モデル(means-end chain model; Gutman, 1982)に基づき、ものごとの特徴(例:炭酸味)と、それが人にもたらす結果(例:さわやか、どの渴きが癒される)とその人にとっての価値観(例:報われる)の間の関係(例:炭酸味がさわやかでのどの渴きが癒され、報われた感がある)を、インタビューによって導き出す手法である。

レポートリーグリッド発展手法においては、調査協力者に複数のものごとを比較させ、彼らが感じる違いを洗い出し、それを出発点としてラダーリングを行うことが多い。この方法は、日本においては主に建築・

環境心理学において、環境の特徴とそこに暮らす人々の価値観との関係を抽出することを目的としてしばしば使用されており、場所(日常環境)の写真を対象として用いる研究が多いことが特徴である。レポートリーグリッド発展手法は、日常環境における建築環境の評価の構造を提示し、主に個人差を抽出する観点で有益な結果を提示している。

また、古賀ほか(1999)は、調査協力者に自身が撮影した写真の撮影理由を自由記述してもらい、その内容を分析するキャプション評価法という方法を提唱している。この手法では、撮影理由を「何の」「どのようなところが」「どのように感じられたのか」の観点から記述してもらおうよう教示するが、これらの教示はレポートリーグリッド発展手法を参考に作られている。キャプション評価法は、調査協力者に評価する場面の選定を任せる点でレポートリーグリッド発展手法とは異なり、対象となる環境に関する、人々の制約の少ない自由な意見を引き出す手法として有効だと考えられる。

レポートリーグリッド発展手法と

キャプション評価法の観光研究への応用

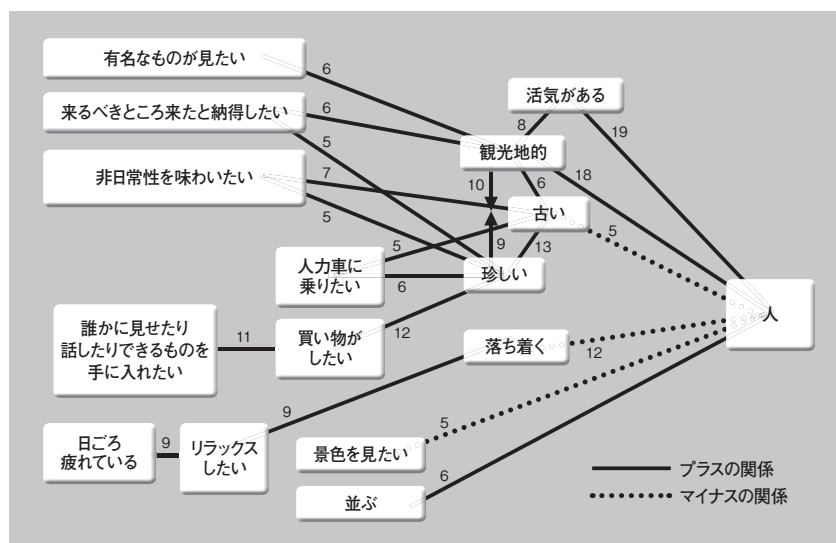
レポートリーグリッド発展手法は、観光地の物理的環境の具体的な特徴と人の感じ方の関係を洗い出す際にも有効だと考えられるが、観光研究におけるその応用例は多くない。海外観光研究では、レポートリーグリッド(Butterill, 1989; Butterill & Crompton, 1987, 1996; Coshall, 2000; Embacher & Buttle, 1989; Pearce, 1982; Pike, 2003; Wainisley & Jenkins, 1993)とラダーリング(Klenosky, 1993; Klenosky, 2002)のどちらか一方を手法として採用したものが散見される。しかし、その多くが対象として観光地や観光スポットの名前を使用しており、調査協力者に具体的に目に見える対象を示すなどして、場所の詳細な特徴と人との関係を抽出するには至っていない。また、キャプション評価法に関しては、筆者の知る限り、観光客と住民の景観評価の比較を行った、伊藤・山口(2012)の研究や植田ら(2012)の研究、後述する筆者自身の研究を除いては、その応用例は見当たらない。

筆者ほかは、欧州(2006)と日

本(2007)の観光地としての歴史的町並みの写真を刺激としたレポートリーグリッド発展手法を用いた日本人学生三十人へのインタビューを行った。その結果、人の存在、商業的要素、車両などの場所の特徴が、真正性、有名性、活動性といった感情や、他人に何かを見せたいといった他者顕示欲求と複雑に関係する可能性が示唆されている(図2)。例えば、彼らの結果によると、他の人の存在は、リラックスできないとも、活気があって話のネタになるとも感じられる可能性が示されている。また、筆者ほか(2011)は、キャプション評価法を用いて、学生および建築・まちづくり関係者の、彼らが住んでいない歴史的町並みにおける写真の撮影理由の内容を分析している。その結果、案内される観光、探索的な観光のどちらを求めるかで、彼らが着目するものとその解釈が異なる可能性が示されている。

これらの研究が旧来の同種の手法を用いた研究と異なる点は、日常とは異なる環境に関する、プッシュおよびプルの両要因に関わる項目が抽出されたことであり、ここに、観光

図2 筆者ほか(2007)の結果:人の評価に関わるもの



(注)「プラスの関係」は「…であれば…である」、「マイナスの関係」は「…であれば…でない」という関係である。また線のそばの数字は、何人の人が二つの言葉を結びつけて答えたかを示している。例えば、「人」の存在は19人から「活気がある」と感じられ12人から「落ち着いたかない」と感じられている

対して、「求めるもの」によって良い悪いとは決めつけられない「評価」をする可能性を示している。Ooi(2002)は、観光者は訪れた環境をそのつど解釈すること、同じ場所であっても自分の行動を変化させる可能性がある」と述べている。例えば、古い家々を観て楽しむと保存された歴史

現象を、建築環境工学の枠組みを基に研究する意味がある。

工学的手法により得られる新たな知見

レポートリーグリッド発展手法やキャプション評価法は、調査協力者に、長時間、管理された状況で場所

に関する評定を要求するため、往々にして協力者の数が少数になるという課題がある。これは自由裁量的で、個人の主観の影響が大きいのと思われる観光の特性を考えると、無視できない懸念材料である。ただ、筆者ほか(2006, 2007, 2011)の結果は、調査協力者が、同じものごとに

的町並みを訪れた人が、そこを自転車で駆け抜ける子供に住民の今の暮らしを感じ、地元の人にとつての町並みの在り方に思いをはせるといったケースがこれに当たるかもしれない。このように、非日常環境と出会うことで、人は自分のなかにあるさまざまな価値観に気づくことができ、それが宮原と宮原(2006)が述べる、観光を通じたその人自身の成長につながるのかもしれない。

このように、レポートリーグリッド発展手法やキャプション評価法といった建築環境工学における手法を用いた研究は、調査協力者に訪問地環境あるいは疑似訪問地環境を注意深く見て評価してもらうことで、こうした人と環境とのフレキシブルな関係に関する示唆を提供する可能性がある。

観光者による地域の魅力の発掘を目指す人々(例えば、観光事業者)にとつても、これらの手法は、観光者が好ましい印象を持つ観光地の特徴を洗い出す可能性があるという点で、有益なツールになり得る。また、特にキャプション評価法は、調査協力者が現地で評価する場面を

選定するため、これを用いることで、観光者が実際に行ってみて分かる魅力力を特定できる可能性がある。また、そのような魅力には、メディアなどの情報で訪問前に察知することが難しい、「顕著でなくとも、全国から人を呼ぶようなものでなくとも、観光資源となり得る対象」(十代田、2010)が含まれる可能性がある。

さらに、レポートリーグリッド発展手法やキャプション評価法といった手法は、既存の観光地の特徴がどのような欲求を持つ観光者にどのように評価されるのかを明らかにすることができると、歴史的建造物等の物理環境への手入れを過度に行わない、ターゲットとする観光者の特徴を絞った観光振興のための手がかりを提供することも期待される。

今後への期待

非日常環境における人と環境との関係を研究対象とすることは、人の可能性(心理学的要因)と、外部から観光者によってさまざまな価値が見いだされる環境の可能性(観光対象化)の双方の拡大に資すると考

えられる。日本の、特に建築環境工学における研究は、環境の複雑性と人との関係を研究する術を磨き上げてきており、その観光研究に対する知的貢献の可能性は非常に大きいと考えられる。その一方で、非日常環境における観光者と環境との関係に関する研究は、日常における人と環境との関係性を中心的に扱ってきた学問分野に対し、新たな知的刺激を与える可能性がある。そのような、他領域への知見の発信が観光研究には求められている。

観光研究と建築環境工学などの他領域が知的情報交換を行うことで、新たな観光地の魅力の発掘につながる知見や、人と環境との相互関係に関する、それまで接近し得なかった知見が生まれるのではないかと考えられる。

(なおい たけと)

直井岳人(なおい たけと)

首都大学東京都市環境学部/大学院都市環境科学研究科准教授。大阪大学で修士号(人間科学)、英国サリー大学で観光経営修士号(with Distinction)と博士号を取得。専門は観光学で、「訪問客による観光地評価」に関する実証研究に主に取り組む。The 18th CAUTHE International Research Conference, Best Research Information Exchange 受賞。

[参考文献]

- Baloglu, S., & McCleary, K.W. (1999). A model of destination image formation. *Annals of Tourism Research*, 26 (4), 868-897.
- Beerli, A., & Martin, J.D. (2004). Tourists' characteristics and the perceived image of tourist destinations: A quantitative analysis - a case study of Lanzarote, Spain. *Tourism Management*, 25 (5), 623-636.
- Botterill, T.D. (1989). Humanistic tourism? Personal constructions of a tourist; Sam visits Japan. *Leisure Studies*, 8 (3), 281-293.
- Botterill, T.D. & Crompton, J.L. (1987). Personal constructions of holiday snapshots. *Annals of Tourism Research*, 14 (1), 152-156.
- Botterill, T.D. & Crompton, J.L. (1996). Two case studies exploring the nature of the tourist's experience. *Journal of Leisure Research*, 28 (1), 57-82.
- Chew, E.Y.T., & Jahari, S.A. (2014). Destination image as a mediator between perceived risks and revisit intention: A case of post-disaster Japan. *Tourism Management*, 40 (February), 382-393.
- Coshall, J.T. (2000). Measurement of tourists' images: The repertory grid approach. *Journal of Travel Research*, 39 (1), 85-89.
- Crompton, J.L. (1979). Motivations for pleasure vacation. *Annals of Tourism Research*, 6 (1), 408-424.
- Echtner, C.M., & Ritchie, J.R.B. (1991). The meaning and measurement of destination image. *Journal of Tourism Studies*, 2 (2), 2-12.
- Echtner, C.M., & Ritchie, J.R.B. (1993). The measurement of destination image: An empirical assessment. *Journal of Travel Research*, 31 (4), 3-13.
- Embacher, J., & Buttle, F. (1989). A repertory grid analysis of Austria's image as a summer vacation destination. *Journal of Travel Research*, 27 (3), 3-7.
- Gallarza, M.G., Saura, I.G., & Garcia, H.C. (2002). Destination image: Towards a conceptual framework. *Annals of Tourism Research*, 29 (1), 56-78.
- Gartner, W.C. (1996). *Tourism development: Principles, process, and policies*. New York: van Nostrand Reinhold.
- Gutman, J. (1982). A means-end chain model based on consumer categorization process. *Journal of Marketing*, 46 (2), 60-72.
- Hunt, J.D. (1975). Image as a factor in tourism development. *Journal of Travel Research*, 13 (3), 1-7.
- Kelly, G.A. (1955). *The psychology of personal constructs*. New York: Norton.
- Klenosky, D.B. (2002). The "pull" of tourism destinations: A means-end investigation. *Journal of Travel Research*, 40 (4), 385-395.
- Klenosky, D.B., Gengler, C.E., & Mulvey, M.S. (1993). Understanding the factors influencing ski destination choice: A means-end analytic approach. *Journal of Leisure Research*, 25 (4), 362-379.
- Lawson, F., & Baud-Bovy, M. (1977). *Tourism and recreational development*. London: The Architectural Press.
- Leiper, N. (1990). Tourist attraction system. *Annals of Tourism Research*, 17, 367-384.
- Naoi, T., Airey, D., Iijima, S., & Niininen, O. (2006). Evaluation of an historical district: Repertory grid analysis and laddering analysis with photographs. *Tourism Management*, 27 (3), 420-436.
- Naoi, T., Airey, D., Iijima, S., & Niininen, O. (2007). Towards a theory of visitors' evaluation of historical districts as tourism destinations: Frameworks and methods. *Journal of Business Research*, 60 (4), 396-400.
- Naoi, T., Yamada, T., Iijima, S., & Kumazawa, T. (2011). Applying the caption evaluation method to studies of visitors' evaluation of historical districts. *Tourism Management*, 32 (5), 1061-1074.
- Ooi, C.S. (2002). *Cultural tourism and tourism cultures: The business of mediating experiences in Copenhagen and Singapore*. Copenhagen, Denmark: Copenhagen Business School Press.
- Pearce, P.L. (1982). Perceived changes in holiday destinations. *Annals of Tourism Research*, 9, 145-164.
- Pike, S. (2003). The use of repertory grid analysis to elicit salient short-break holiday destination attributes in New Zealand. *Journal of Travel Research*, 41 (3), 315-319.
- Qu, H., Kim, L.H., & Im, H.H. (2011). A model of destination branding: Integrating the concepts of the branding and destination image. *Tourism Management*, 32 (3), 465-476.
- Walmsley, D.J., & Jenkins, J.M. (1993). Appraisive images of tourist areas: application of personal constructs. *Australian Geographer*, 24 (2), 1-13.
- Weaver, D., & Oppermann, M. (2002). *Tourism Management*. Milton, Australia: John Wiley & Sons Australia.
- Zhang, H., Fu, X., Cai, L.A., & Lu, L. (2014). Destination image and tourist loyalty: A meta-analysis. *Tourism Management*, 40 (February), 213-223.
- 伊藤正太・山口邦雄(2012)観光まちづくりにおける観光客と地域住民の違いによる景観の評価傾向と来訪意向に関する研究-秋田県仙北市角館中心市街地を対象として-日本建築学会東支部研究報告集計画系(75)、83-84.
- 古賀啓章・高明彦・宗方淳・小島隆矢・平手小太郎・安岡正人(1999)キャプション評価法による市民参加型景観調査:都市景観の認知と評価の構造に関する研究 その1 日本建築学会計画系論文集(517)、79-84.
- 宮原英種・宮原和子(2006)人間環境論 ナカニシヤ出版
- 讃井純一郎・乾正雄(1986)レポートリーグリッド発展手法による住環境評価構造の抽出:認知心理学に基づく住環境評価に関する研究(1) 日本建築学会計画系論文集(367)、15-22.
- 佐々木士郎二(2007)観光旅行の心理学 北大路書房
- 十代田朗(編)(2010)観光まちづくりのマーケティング 学芸出版社
- 植田征道・大井尚行・高橋浩伸・森永智年(2012)地元居住者と来訪者による景観評価の比較-キャプション評価法を用いた玉名市高瀬地区での調査-日本建築学会講演梗概集(環境工学1)、143-144.